

- 「南海トラフ巨大地震への対応」というのは、特出しすべき項目である。これが確実に起きると言われている時に、向こう10年間から15年間ぐらいまで重点的にやらなければいけないという意気込みが、「めざす4つの都市像」の中で特出しになっていない。
- 南海トラフ巨大地震は、日本が大変なことになり、誰も名古屋には助けてくれないからこそ、自分たちだけで生き抜かなければならないということと、確実に来ることが分かっているので、備えている地域だけが生き抜けるということがあるから、相対的に特出しになる。
- ゲリラ豪雨はどこでも来て1箇所あたりの被害は大きいですが、周辺にはあまり被害がなく助けてもらえることもあるため、そのメリハリは必要である。南海トラフ巨大地震を特出しする時には、なぜ特出ししたかを分かるようにしなければならない。
- 課題には外乱ばかり書いてあるが、外乱だけでなく、その時に何を指すかということがあるのではないかと。全て外的要因であり、重点施策の書き方が受身的ではないか。これでは前向きに、これを契機にしてこの地区を前に推し進めるといった雰囲気醸成ができていない。
- 名古屋には売りがあるはずで、先人たちの先進性、進取の気性が消えてしまっている。非常に独立精神が旺盛であったし、暮らしやすいから出生率が高い。安全なところに産業も官庁街もある。戦災復興の時に他地域に先駆けた都市計画をしているからこそ、まだいくらでも伸びしろがある。
- 文章にするとどうしても大事なエッセンスの力強さが減ってきてしまうので、ワンフレーズで前向きさが出てくると良い。ひとつ目の戦略は魅力、2つ目は日本一安全・安心、3つ目は、とにかく産業である。産業というキーワードが安全・安心のところに出てきていない。命とともに生活を守るには産業を守らないといけない。
- 平時の産業の魅力は必要で、平時に産業を興すのにどれだけ魅力的に作れるか。他のところに行くよりここの方がずっと安全なのだから、来てくれた産業は絶対に守り抜くと言った方が良い。
- この圏域はいつでも独立しても良いぐらい地産地消ができています。人もいるし、水も産業も電気も農業もあり、オランダと同じ大きさぐらいの地産地消のまちがある。日本の将来の姿はこの都市圏のようにならないといけないというぐらいの、日本の見本となるべき都市圏であると言えないだろうか。
- 農業は日本一豊かで水も一番ある。産業も日本一である。人の定着率も一位で外に出て行く人が少ない。この魅力を外にも分かってもらいつつ、ここは日本一良い場所だとアピールをしても良い。むしろ、このまちの魅力探しができていない。
- 名古屋の自慢するところとして外の人に言えるようなものがより伸ばすものではない

だろうか。弱いところ、欠点を少しずつ埋めていくよりは、強さを伸ばして先にアピールして、行政として弱いところを対策していかなければいけない。

- 東京や大阪の弱さを名古屋の強さだといってアピールすることはありうるのではないか。富士山が噴火したら3,700万人の食糧は誰も運べないし、首都直下地震がきたら誰も火事を消せないから、東京は生き残れないだろう。
- 「南海トラフ地震被害想定」の全壊・焼失棟数を見ると、消防では対処できないぐらいの数の全壊・焼失家屋があり、絶対に行政は助けられないので、市民の力を上げて、市民に火を消してもらえないといけないため、施策の1番は教育にならないといけない。
- 「市西南部のゼロメートル地帯」の0m未満の部分は津波が来る前に堤防が崩れたら浸水してしまう。では、堤防を徹底的に強化して中を守るのか、土地利用を見直すのか、それとも、速やかに安全な場所に移るが財産はなくなるということを知覚するのか。ただし財産をなくしたら、その後で使うお金は莫大になる。
- 事前に少しずつ土地利用の見直しをするという覚悟を決めるかどうかである。今の土地利用計画で言えないのであれば、将来はこうならないといけないというビジョンを事前復興計画として見せて、そうやっていく雰囲気作りをするかどうかである。
- 高齢者の災害時の死亡率は若者の5倍なので、30年後に高齢者だらけになっていたら被害は5倍になる。そういうことをどれだけ我が事感を持ち、皆で共通認識を持てるかである。
- 災害が一旦発生すると、避難所は満杯になる。そこに水や食糧がどれだけあるかというと、ほんのわずかしかない。災害が発生した時にどうなるのかと皆が不安がるからこそ自分たちが準備をしないとといけないという教育が必要であるが、そういうことが行われているか。
- 名古屋市は地域の防災力を高めようとするとうるまじ協力委員になってしまう。例えば、うるまじ協力委員の中から少し若い年代の人たちをうるまじの防災担当とするということも考えられる。20年後には、今のうるまじ協力委員はほとんどいないので、次の世代にどう伝えていくかということを含めて、早急の対応が必要である。
- 名古屋は広いので、区の中にも土地が低いところと地盤の良いところ、津波が来るところと来ないところがある。区ごとに対応を考えていくとことを基本原則にしながら、地域ごとに対応をしていかなければならない。現状ではそれをやっていないのではないかと懸念している。
- 災害が起きた瞬間は町内会でも広いぐらいである。どうやって助け合うかは、町丁目の話になってくる。実際に起こった時にこの人たちの力が必要だということを学区や町内会の中で周知できているかどうかである。
- 防災教育については国全体が防災の単元を教えていこうとやっと言いだしたばかりで

あるが、教える方の先生が何を教えて良いか分からない。もう一方の家庭での防災教育もしなければ防災力は高まらない。地域と学校は両輪でやっていかないといけない。

- 地域に丁寧に対応していくことは大きな目標に見えるが、ひとつひとつぶしていく作業を早く始めないといけない。まばらになるのは結果論であり、その途中で災害が起きても仕方ない。何をしていくかという計画を早く立ち上げて進めていかないと、何も知らされないまま大人になっていく子どもが増えていく危機感がある。
- 教育の問題は大事で、社会のベースとなる人の意識そのものがどう変わるかである。その人たちが本気になって、その事を本気で考える集団になれば社会は変わっていく。大都市になればなるほど、他人事になってしまい、口では言うけど、全員の意識に伝わっていない。
- あれだけ面倒であったゴミの分別を名古屋市は先頭で走れた。あの成功体験はすごい。あまねく市民全員を変えることに日本で始めて成功した。何かが起こると名古屋市は日本一のことが出来るのだから、そういう機運ができれば良いだけではないか。
- もう少し市民の力を信じて、市民と一緒に物事を進めていくことに対して柔軟になってほしい。一市民が有識者の十分の一の話をしたとしても、それが大きく積み重なっていき、その人の周りの防災力の向上につながっていく。
- 行政の限界を行政が言うのではなく、市民と行政の間をつなぐ人をうまく育てないと対立関係が残ってしまう。それをつないでいるのがNPOであり、町内会の人たちなので、その連携がうまくいくと良い。
- 東日本大震災でも職員が亡くなっているし、参集もできない。そういう状況を考えた時に、行政が最終的な災害救援の柱として何をしてでも対応してもらいたいという希望があるが、南海トラフ巨大地震と謳った瞬間に、その機能はないというぐらいのメッセージがある。ただし、その後、行政が果たすべき役割はたくさんある。
- 生きるか死ぬかの時間帯や、避難所でのひもじい思いや寂しい思いを緩和させるには地域力しかない。そこにNPOが到達できれば良いが、多くの場合はボランティアもNPOもすぐには行けないので、地域の力が必要である。一緒にやっという雰囲気が出ていくともっと進む。
- 市としては早くに復興したり、暮らしを取り戻さないといけないが、その解決策をもっと分かりやすく言うしかない。ひとつは、危険は避けなければならないので、できるだけより安全なところに住んだ方が得であるということ、言いにくいけれど言わなければならない。それこそが土地利用の誘導策である。
- 平時にまちの中に入って、様々な人たちとの役割分担をしたり、主役となる人たちを育てておいた上で、何かあった時には行政は無理だけれど今なら協力できるのだから、一緒に協力体制を作って、皆がきちんと動けるような協力も準備も最大限するというアピールを事前にしておいて欲しい。

- 町内会、学区、区といった単位で、それぞれのプレーヤーをまとめた上で、どういうことを事前・事後でするかの整理が必要である。市単位であれば産官学民のプレーヤーにどういう人がいて、どのように事前の役割分担をして、この地区を災害面だけではなく、地域そのものを強くするにはどうすれば良いかを考えた方が良い。
- 産官学民の連携と地区単位の階層性を考えていくと、名古屋市だけではできないので、近隣市町村との連携をもっと強化してもらいたい。名古屋市がもっと前向きになって他を助けてでもやるか、他の市町村の意見を聞きながら大きなグレーターナゴヤを目指すのかということに取り組まないと、名古屋中心エリアだけが取り残されてしまう。
- 技術者がたくさんいる名古屋市だからこそ、周辺市町村を同じ目線で見ながら、エリア全体のビジョンを一緒に作るぐらいのことをしてはどうだろうか。防災や産業、都市計画の分野は、名古屋だけでは小さすぎるので、グレーターナゴヤで平時から地域を考えるような場ができた方が良い。
- 名古屋の弱いところは大学を含めた学力である。日本で3番目の地域なのに、3番目の人口に比例したアカデミズムやシンクタンクの力がない。大学やシンクタンクを育てる努力をしないと、名古屋のことを考えるのは東京のコンサルタントになってしまう。
- 地域を守るために大事な環境問題や都市政策、防災の問題だけでも、たくさんある大学を全部結集して、地域の都市センターも含めて、エリアを守るためのシンクタンク機能を作ってはどうか。そういうことを言い出せるのは行政しかない。
- 少なくとも愛知県立大学や名古屋市立大学のように、地方自治体が持っている大学は、私大と同じことを教えなくても良い。この地域を守るために必要となることを一生懸命研究したり、そういう人を育てるという役割分担ができる。
- 今はパートナーシップの時代ではなく、本気になって共同作業ができるようなコラボレーションをしないと守れない。その一歩目として一番便利なのが防災の問題なので、防災の問題を様々な社会課題の解決の一歩目として、それを産業、環境や福祉の問題に展開するというビジョンを描いた方が得ではないか。
- 南海トラフ巨大地震が来たら1週間分の備蓄がいると言われており、一人ひとりが1週間分の備蓄をすることも大事であるが、寝たきりの人にできるか、あるいは家がつぶれた人が取り出せるかがある。最終的には生き残った者が皆で分かち合うという温かい気持ちを伝えていくことが、防災の役割である。
- 自分のことしか考えていない人が多いので、そこに警鐘を鳴らさないといけない。自分の命を守るという意識を超えて、皆でどうやって生き残るかということを考えていく場を作っていかなければいけない。
- この国に何かあった時に、この三の丸エリアほど大事な場所はない。防災面でいえば、ここは災害拠点エリアで、日本全体の防災拠点エリアにもなるし、世界の拠点になるかもしれないので、そういう視点を持って、名古屋だけではなく中部エリア全体に対して責任を持っていくためにどうすべきかのビジョンを作っていただきたい。

- 三の丸が良くなれば、すごく魅力的なまちになる。栄からここへ来れば、向こうには「文化のみち」もある。名古屋駅に重心が行き過ぎているのをこちらにも持って来れるし、これだけ昭和のまちが現役で維持し続けられている都市は日本でここしかないので、誰にも居心地の良いこの台地の上の雰囲気を守っていただきたい。
- ハード対策はものすごく大事で、しっかりやることを前提にしつつ、これとこれはするが、これ以外のことはもうできないということを逆に打ち出した方が分かりやすいのではないか。
- 「共助」を例えば「分かち合う」とか「助け合う」といった、当たり前ではあるが、丁寧な言葉を使って、学校、地域、あるいは職場で、分かち合って、助け合って、行政のできない部分を補いましょうというスローガンを優しいメッセージとして市民に伝えていくことが大事である。